

大阪府大東市におけるまちへの「愛着」についての調査と分析

大阪産業大学大学院工学研究科 中筋 梢衣
大阪産業大学工学部 榊原 和彦
大阪産業大学工学部 川口 将武
大阪産業大学工学部 檀上 祐樹

1. はじめに

人が場所と関わることから生まれる心理的關係を表すキーワードとして「愛着」がある。愛着とは、人が他の人や物に対して価値を見出すことから抱く断ち切れない思いであり、情緒的な結びつきの感情である。個々の住民がまち、場所に対して愛着を抱くことは、そこでの生活をより豊かにし、そこに対する何らかのモチベーション（持続・維持あるいは発展してほしい、したい、などと願い、そのために行動することへの動機付け）を抱くことにつながるだろう。住民主体のまちづくりを考えると、愛着という人と場所との心理的關係を考慮する必要がある。そこで、本研究では、日常的な、普段の生活の中で抱くにいたる、住まうまち・場所への愛着に着目し、アンケート調査に基づいてその要因分析を行う。

既存研究では、地域情報の獲得が居住地への愛着形成にどのような影響があるのかをみたもの¹⁾がある。また、愛着に關係の深い内容の研究として、ふるさとに着目しそのイメージの構成要素を明らかにしようとしたもの²⁾、日常風景に着目し、そこから生活者の生活空間の環境特性を明らかにしようとしたもの³⁾、住民の思い出の場所としての屋外環境へのかかわり方と意識を把握したもの⁴⁾、原風景に着目し、その形成の契機、タイプを見るもの⁵⁾もある。これらに対し、本研究では、愛着の対象を現在住んでいるまちに限定する一方で、そこに愛着を抱くに至る理由には回答者の生活経験のあらゆる側面が含まれることを考慮して、愛着につながる要因を限定することなく広く捉えてその構造を明らかにすることを目指した。

2. 調査の概要と結果

記述式を主内容とするアンケート調査を行った。調査項目は大きく2つ設け、設問Ⅰ：現在住んでいるまちに対する愛着の有無とその内容・理由、設問Ⅱ：現在住んでいるまちで特に愛着のある場所の有無と所在およびその説明、がその内容である。本論では設問Ⅰについての分析を行う。

アンケートは、平成17年1月に実施し、大阪府大東市のJR東西線住道駅周辺以東部（大東市全54町のうち40町）を対象とした。大東市は、東部から急峻な生駒山系の山間地と低湿地平野が約1:2の面積比率で構成されており、古くから残る集落と比較的新しい住宅地とが混在するが、住宅地図、古地図を参照し、集落の種別に偏りがなくなるように4,000戸を抽出した。なお、このとき、町別のアンケート配布数は、平成16年11月の大東市町名別人口一覧表をもとに町ごとに、 $[\text{町内あたりの配布数}] = (\text{町内世帯数} / \text{アンケート配布範囲全世帯数}) \times 4000$ （小数点以下は四捨五入）とした。調査方法は、調査用紙を各戸のポストに投函することで配布し、料金受取人払いで郵便により返送してもらう方法とした。

回収枚数は443枚（回収率は11%）であった。回答者の内訳は男性197人（43%）、女性234人（54%）、無回答12人（3%）、年齢は、60代以上で全体の50%を占めており、住居暦も、30年以上が50%を占めた。

結果として、現在住んでいるまちに愛着はありますか、という質問に対して、あると答えた人は340人（77%）で、ないと答えた人は85人（19%）、無回答は18人（4%）であった。およそ8割の人が様々な理由から、現在住んでいるまちに愛着があると答えていた。

3. 現在住んでいるまちに愛着をもつ要因

設問Ⅰのまちに対する愛着を持つ内容・理由についての記述回答（以後、「理由記述」と呼ぶ）から、まちに愛着のある理由となる対象や事柄に関する「記述単位」に着目し、要因として抽出した。例を挙げると、「祖父の代以上から居住しており自然も残っていて生活していく上でもある程度便利であり古くからの友人近所付き合いがあるから」という理由記述から、下線部分の4つの記述単位を要因として読み取れる。回答から得られた全339通りの理由記述から、これらを抽出し、よく似た記述単位についてはまとめるものとし

て計 53 要因を見出した。さらにK J法により、類似要因をまとめてラベルをつけ、15 の要因類とした。結果を図-1 に示す。図には、要因類および要因番号を付し、要因の末尾には、その要因に触れている理由記述の数（回答数）を記してある。この表にもとづいて、以下に愛着の要因について考察を加える。

- ① 「①長年住んでいる」では、「②ふるさとである」と「ふるさとではない（生まれた時から住んでいるのではない）が長く住んでいる」という2つの類型がみられる。ふるさとである場合には、先祖代々という時間性に重みを見出していたり（要因 6）自分が生まれ育ったところであることを強調して述べている（要因 5）。一方、ふるさとではないが長く住んでいる場合には、単に長く住んでいることを言っている 場合が多い（要因 1）が、ふるさとと同じよう（第二の故郷）に感じるようになった（要因 3）あるいは、長く住むことで得られた経験・体験があるため離れたくない（要因 2）といった長く住んだ結果として抱くにいたった「思い」も挙げられている。
- ② 「③生活体験」に分類される要因には、暮らしや仕事、家族との生活史に関わるものなどが挙げられているが、結婚、子育てといった生活の節目（要因 11）12）、家族の誰かのゆかりの地である（要因 14）などは、比較的多く挙げられている。市や地域の「④行事・イベント」にまとめられるスポーツ大会や祭り、ボランティアに参加したということ（要因 8）9）は、主体的に参加した事柄に着目している要因であり、重視してよいだろう。「⑥仕事」にまとめられているものも、ボランティアなど自発的参加とは異なるが、まちへ自らが関わることが愛着を形成する要因であることを物語っている。
- ③ 「⑤コミュニケーションがある」では、友人、身内や隣近所、子供に関わる交流などの身近なつながりを具体的に述べるもの（要因 17）18)19) 20）と、全体的な地域のつながり・コミュニケーションの良さを挙げるもの（要因 16）がある。

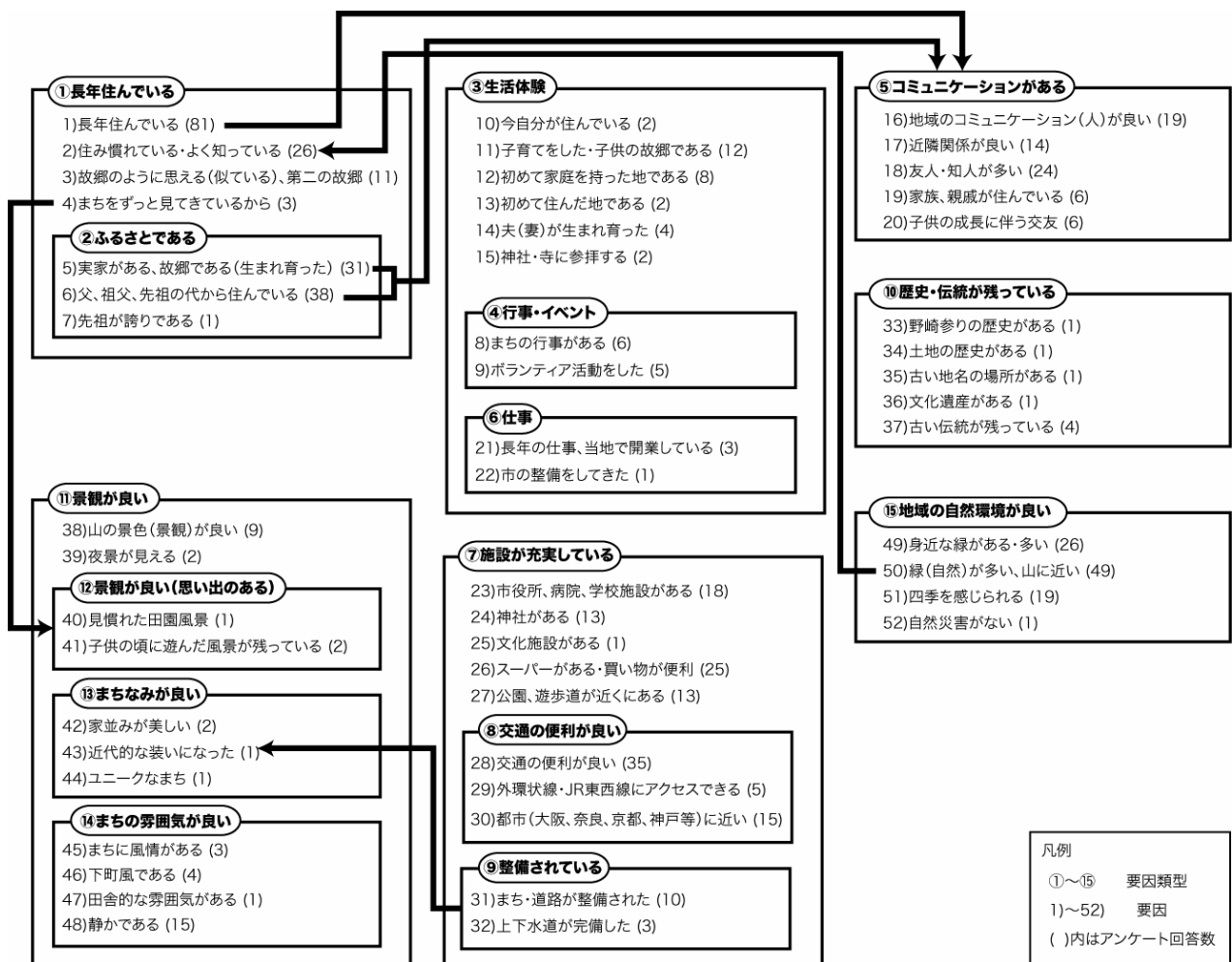


図 - 1 愛着の対象となる要因の関係図

- ④ 「⑦施設が充実している」に含まれるのは、市役所・病院・学校などがある（要因 23）、買い物（要因 26）といった生活一般に関わる施設の充実と「⑧交通の便がよい」、「⑨整備されている」とに分けられる。回答数から見ると、最も重視されているのは、生活一般に関わる施設の充実であり、次いで「⑧交通の便がよい」と思われる。注目されるのは、生活基盤で無いにもかかわらず比較的多く挙げられている神社・寺（要因 25）である。有名な野崎観音に限らず地域の神社が挙げられており、参拝の場、落ち着く場、コミュニティの場として愛着をもたれているようである。
- ⑤ 「⑩歴史・伝統が残っている」は、回答数は多いとは言えないが、見逃すべきではないだろう。
- ⑥ 「⑪景観がよい」も回答数は比較的少ないが、着目すべきである。山のある風景を挙げるもの(要因 39)、山側の住宅から見える大阪市内の夜景を挙げている(要因 40)のは、土地柄を反映しているよう。他の要因からも、地域の特性や雰囲気をよく反映していることが伺える。
- ⑦ 「⑮地域の自然環境がよい」は、回答数がかなり多いことで注目できる。山があること（要因 51）、緑（自然）が身近であること（要因 50）で、実際に山を散策する中で愛着を抱いたり、山に入ることは少なくとも、目にするだけで四季を感じたりして、愛着を抱いていることがわかる。身近な緑で具体的に挙げられているのは、神社、近隣公園や治水緑地、遊歩道の緑などである。

4. 愛着の要因のタイプ

表 - 1 愛着の要因と愛着のタイプ

愛着の要因のまとめ		NO	愛着の要因	数値	愛着のタイプ詳細	愛着の要因タイプ				
長年住んでいる	ふるさとである	1)	長年住んでいる	81	時間的關係型	主体依拠型				
		2)	住み慣れている・よく知っている	26						
		3)	故郷のように思える(似ている)、第二の故郷	11						
		4)	まちをずっと見てきている	3						
		5)	実家がある、故郷である(生まれ育った)	31						
		6)	父、祖父、先祖の代から住んでいる	38						
		7)	先祖が誇りである	1						
生活体験	行事・イベント	8)	まちの行事がある	6	主体的關係維持型	中間型				
		9)	ボランティア活動をした	5						
		10)	今自分が住んでいる	2	社会的關係型					
		11)	子育てをした・子供の故郷である	12						
		12)	初めて家庭を持った地である	8						
		13)	初めて住んだ地である	2						
		14)	夫(妻)が生まれ育った地である	4						
		15)	神社・寺に参拝する	2						
コミュニケーションがある		16)	地域のコミュニケーション(人)が良い	19		対象依拠型				
		17)	近隣関係が良い	14						
		18)	子供の成長に伴う交友	6						
		19)	友人・知人が多い	24						
		20)	家族、親戚が住んでいる	6						
生活体験	仕事	21)	長年の仕事、当地で開業している	3						
		22)	市の整備をした	1						
施設が充実している		23)	駅近い	22	環境要素型					
		24)	市役所 病院 幼・小・中・高・大学がある	18						
		25)	神社・寺がある	13						
		26)	文化施設	2						
		27)	スーパーがある・買い物便利	25						
		28)	公園、遊歩道が近くにある	13						
		交通の便利がよい		29)			交通の便利が良い	13		
				30)			外環状線・JR 東西線にアクセスできる	5		
				31)			都市(大阪、奈良、京都、神戸等)に近い	15		
		整備されている		32)			まち・道路が整備された	10		
				33)			上下水道が完備した	3		
歴史・伝統が残っている		34)	野崎参りの歴史がある	1						
		35)	土地の歴史がある	1						
		36)	文化遺産がある	1						
		37)	古い伝統が残っている	4						
		38)	古い地名の場所がある	1						
		39)	山の景色(景観)が良い	9						
景観がよい	景観がよい思い出のある	40)	夜景が見える	2						
		41)	古きよき風景が残っている	1						
	42)	子供の頃に遊んだ風景が残っている	2							
	まちなみが良い	43)	家並みが美しい	2						
		44)	近代的な装いになった	1						
	まちの雰囲気がよい	45)	ユニークなまち	1						
		46)	まちに風情がある	3						
		47)	下町風である	4						
		48)	田舎的な雰囲気がある	1						
	地域の自然環境がよい		49)	静かである			15			
50)			身近な緑がある・多い	26						
51)			緑(自然)が多い、山に近い	49						
52)			四季を感じられる	19						

愛着の要因のあり方・性質から愛着のパターンを見出すこと試みる。愛着を抱く要因となった事柄を考えると、まず挙げられるのは、主体（回答者）の生活者としての経験・体験に基づいている事柄である。これを「主体依拠型（要因）」と呼ぶことにする。他方、まちを構成している空間・環境や施設あるいは体制などに関わるものがある。これを「対象依拠型（要因）」と言うことにする。この分類は、実は、必ずしも明確な類型という訳ではなく、愛着の要因を考えるにあたって、主体側と対象側のどちらに重心があるかという点に対する着目としての分類と言える。そうすると、主体側とも対象側とも言える事柄がありそうである。それは、社会とか組織に関わる事柄であって、主体がその一員であるような場合には「主体依拠型」と言えるだろうし、主体がそれに対して対象（客体）として対処した

り、捉えたりしていれば「対象依拠型」と言えると考えられる。これを「中間型」と呼ぶことにする。

これらのタイプに各要因をあてはめ、表-1に示すように、「主体依拠型」は、要因1)から9)、「中間型」、は要因10)から20)、「対象依拠型」は要因21)から52)とする。これらをもう少し詳しく見てみよう。「主体依拠型」の要因のほとんどは、主体がまちに住まう間に経過した時間に関わっている。その意味で「時間関係型」要因と捉えることにする。しかし、要因8)9)は、単なる時間経過よりも主体のまちとのより積極的・主体的関わりを保つような行動に関わる。そこで、これを「主体的関係維持型」要因と考える。「中間型」は、全て主体の社会との関わりに関するものであり「社会的関係型」要因である。ただし、「⑥仕事に」に類別される要因21)22)は、「対象依拠型」にも関わらずこれに入る。なお、むしろこれらを「対象依拠型」とすることを疑問とされるかも知れないが、主体の私生活行為の中で生まれる要因とは区別してこうしている。

ここで、表-1と前出の図-1から要因タイプの特徴やタイプ間の関係を考察しよう。

- ① 時間的關係型の「①長年住んでいる」は、要因単独で愛着につながっている回答が多い
- ② 時間的關係型要因は、主体的關係維持型や社会的關係型といった時間をかけて関係を築くものと因果關係がある。すなわち、「①長く住んでいる」ことで「③生活体験」が積み重ねられ、まちの行事やイベントに参加する機会や子供を通じた学校行事があり、その中で「⑤コミュニケーション」が築かれていく。このように、この時間的關係型要因は、他の愛着要因の原因になることが多い。
- ③ 「③生活体験」は「⑤コミュニケーション」の原因となっており、社会的關係型要因の間で因果關係が存在するが、このいずれも時間的關係型は影響している
- ④ 主体的關係維持型要因は、社会的關係型の中の「⑥仕事」の場合と同じく愛着への強い要因となっているが、特徴的なのは、その要因の結果として生起する事柄や、イベントの場所などその要因と同時的に生起する事柄が共に挙げられることである。
- ⑤ 環境要素型のものは、内容的には互いに独立していて相互の關係性は希薄であり、いずれもが単独に愛着の要因になり得る。しかしながら、実際に単独で要因として挙げられるのは、時間的關係型が圧倒的に多く、環境要素型のものは、他の（環境要素型）要因と複合的・並列的に挙げられることが多い。

5. まとめ

339通りの愛着についての理由記述から、愛着を抱く要因となる対象・事柄として、52要因を見出し、次いで、これをKJ法によって15要因類型にまとめた。また、要因および要因類型を主体（回答者）側に依拠するものであるか、対象（環境）側に依拠するかによって、主体的依拠型、対象依拠型、中間型の3タイプに分け、さらに、要因の内容・性質に着目して、その中から時間的關係型、主体的關係維持型、社会的關係型、環境要素型の4タイプを見出した。要因・要因類型・タイプのいずれも、その抽出は主観的判断に基づくものであるので、客観的妥当性については、より詳細な検証が必要と考えるが、たとえば、理由記述の中に最も多く見られた「①長年住んでいる」「②ふるさとである」は共に時間的關係型に分類され、それ単独で愛着の要因となる数も最も多く、さらに、他の要因の原因にもなり、愛着への結びつきが強い要因であるといった興味深い知見を得ることができた。

本論文では、アンケート中の“住まう町への愛着”のみについての分析を述べたが、“まちの中の愛着のある場所”についても今後分析し、発表したいと考えている。

<参考文献>

- 1) 檜野光聡・添田昌志・大野隆造(2001)「地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響」日本建築学会大会学術研究論文集
- 2) 芮京祿(1995)「児童期の自然体験とふるさとイメージとの関連」日本都市計画学会学術研究論文集
- 3) 小浦久子・船橋國男・奥俊信・本多道宏(1997)「日常風景にみる住宅市街地の環境特性に関する基礎的研究」日本都市計画学会学術研究論文集
- 4) 全現美・鳴海邦碩・田中みさ子(1995)「住民意識からみた団地屋外空間整備のあり方に関する研究」日本都市計画学会学術研究論文集
- 5) 茂原朋子・渡辺貴介・十代田朗(1991)「青年の“原風景”の特性と構造に関する研究」日本都市計画学会学術研究論文集